

## トピック さやえんどうの需給動向等について

今回は、これから旬を迎える、鮮やかな黄緑色で春の到来を感じさせる「さやえんどう」の需給動向等について紹介する。

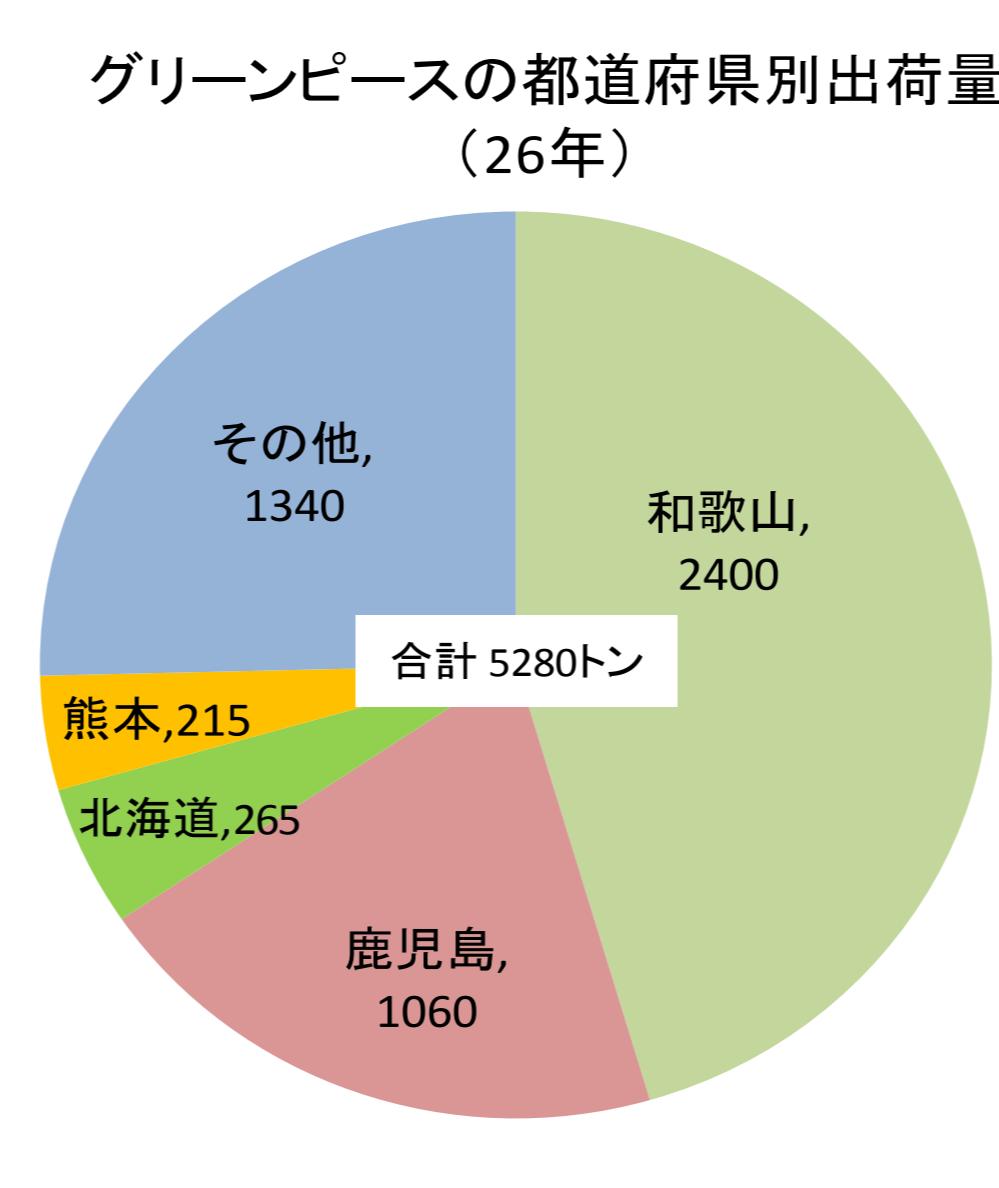
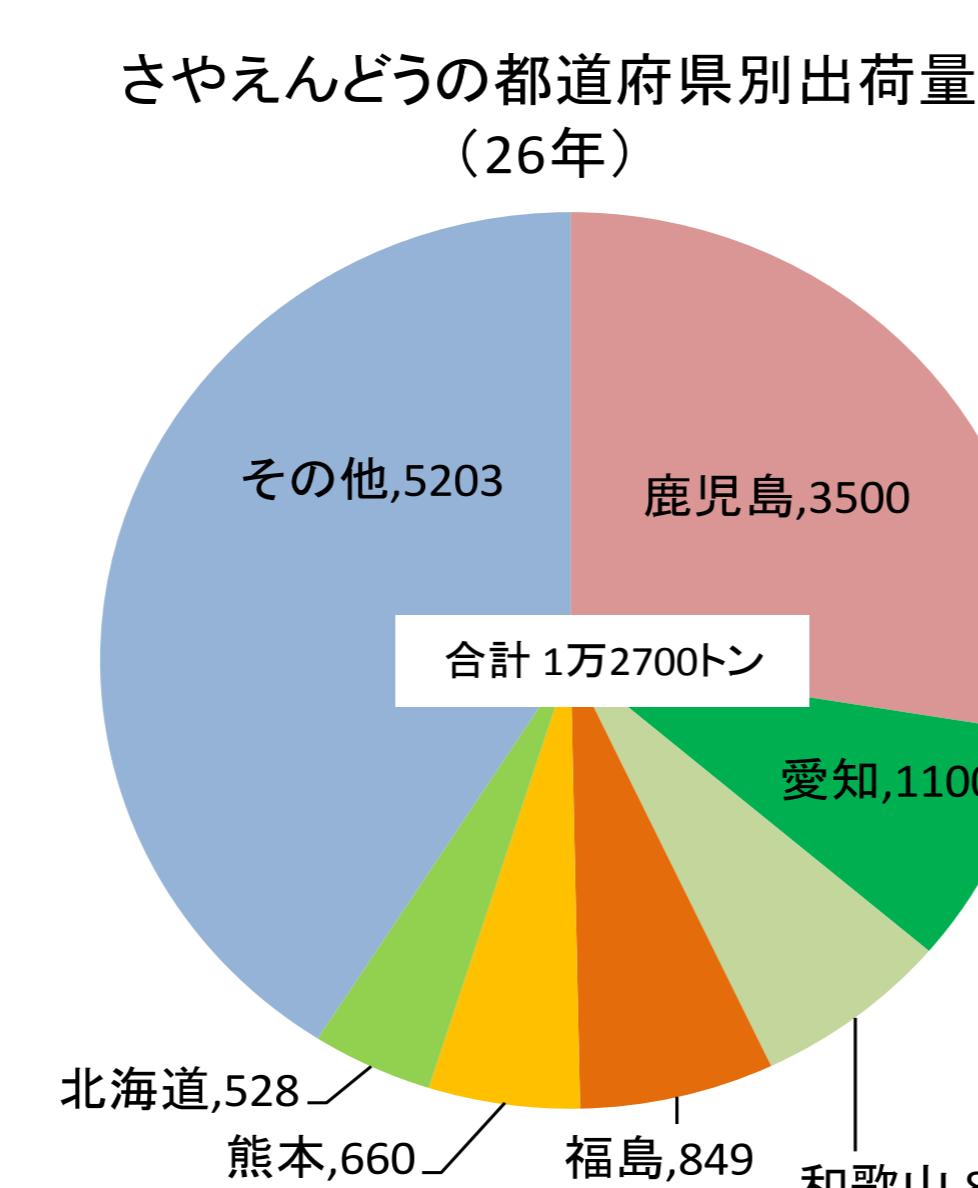
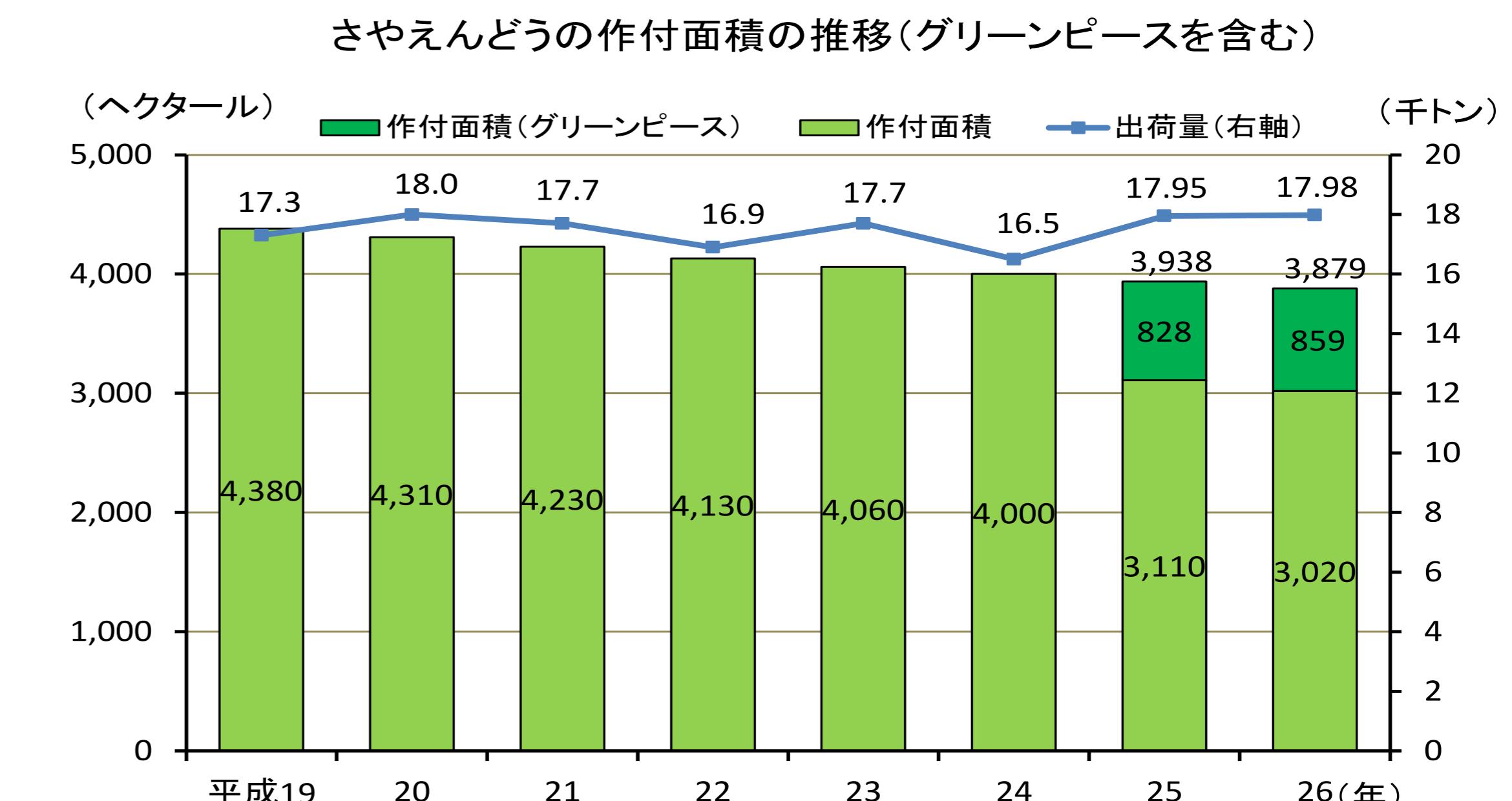
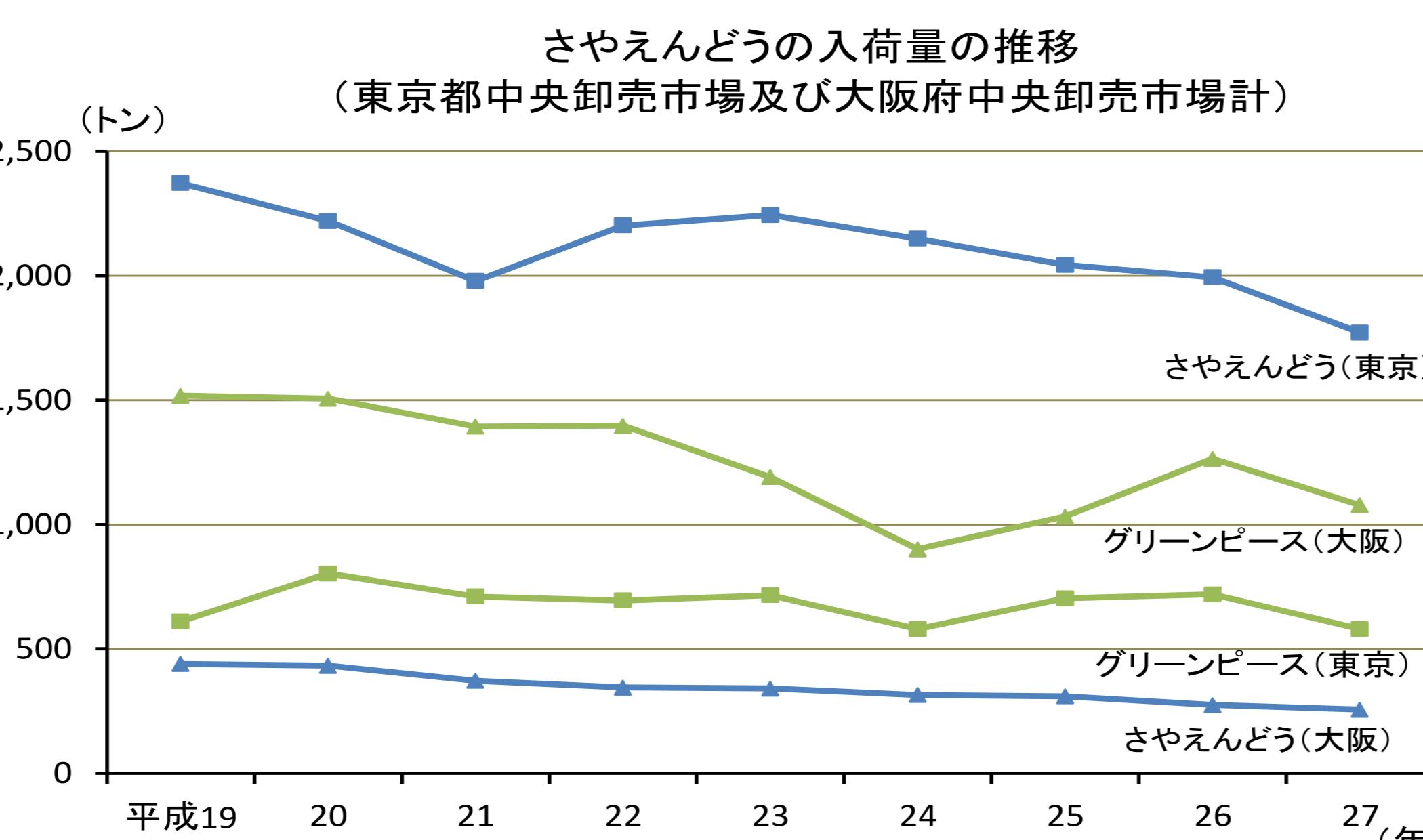
えんどうは、収穫するタイミングにより、豆苗(とうみょう) (スプラウト) 一さやえんどう (締さや) 一実えんどう (グリーンピース) 一えんどう (豆) と、名前が変化していき、成熟するまでの各過程で味を楽しむことができる野菜である。さやえんどうは、えんどうの若いさやごとを食べるものをさすが、さやえんどうの他にさやごと食べるもののとして、米国で品種改良され、さやえんどうより肉厚で実が大きくさやごと食べるスナップエンドウ (スナックエンドウ) 、同じく肉厚な砂糖えんどうなどもあり、両者とも甘みが強いのが特徴である。

関東と関西のえんどうの流通量を比較すると、関東では、雑煮、ちらし寿司など料理の彩りや付け合せに用いられることが多いさやえんどうが流通の大半を占めている。一方、関西地方では、豆ごはんや甘煮、和え物等のおかずとして食卓にのぼることが多いため、グリーンピース (関西では「うすいえんどう」が多く使用される) の流通量が多い。

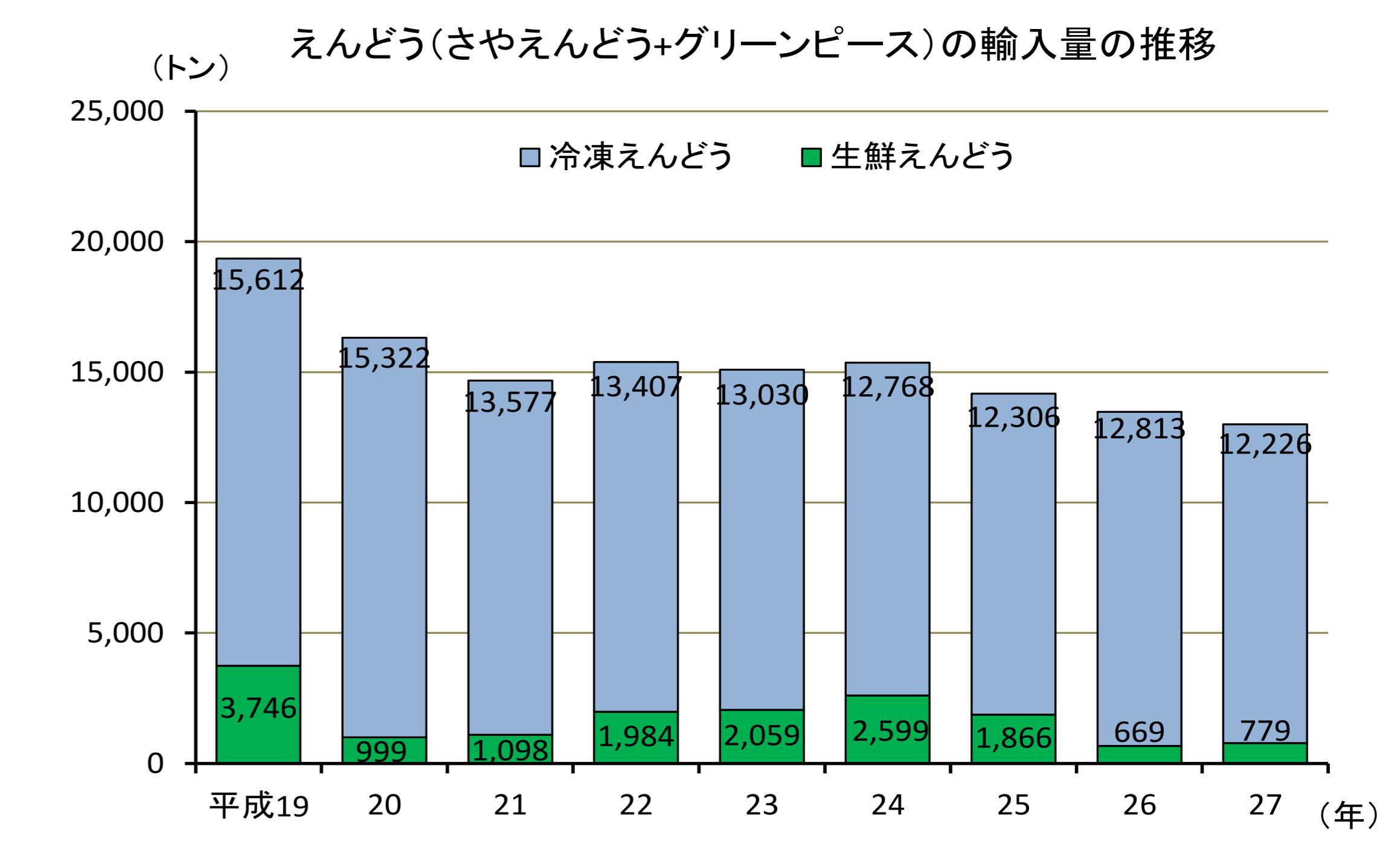
26年のさやえんどうの作付面積は3020ヘクタール、出荷量は1万2700トンとなっており、鹿児島県 (3500トン) が最も多く、次いで愛知県 (1100トン) 、和歌山県 (860トン) となっている。グリーンピースの作付面積は859ヘクタール、出荷量は5280トンとなっており、和歌山県 (2400トン) が最も多く、次いで鹿児島県 (1060トン) 、北海道 (265トン) となっている。全体では鹿児島県、和歌山県及び愛知県の3県で全国のおよそ5割を占めており、和歌山県産は主に近畿方面、鹿児島県産は主に首都圏に出荷されている。また、全体の作付面積と出荷量を19年と比較すると、作付面積は89%となっているものの、単収の向上などにより出荷量は104%となっている。主産地では、和歌山県及び愛知県が減少傾向で推移している中、鹿児島県は作付面積が121% (473ヘクタール) 、出荷量が150% (4560トン) 、と大幅な増加となっている。

さやえんどうとグリーンピースを合計したえんどうの輸入量を見ると、生鮮えんどうは、19年には3746トンあったものの、国産への需要の高まり等から、27年は779トンと大幅に減少している。冷凍えんどうも減少傾向にあり、近年では1万2000トン台で推移している。27年の輸入量は1万2226トン、国別の比率は、中国45% (5548ト

-



資料:ベジ探(原資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」、東京・大阪「市場月報、財務省「貿易統計」)



●問い合わせ先 独立行政法人農畜産業振興機構 野菜需給部 需給業務課 戸田、河原、斎藤、海老沼 TEL03-3583-9448、FAX03-3583-9484 ご意見、ご要望をお寄せください。

◆「野菜の需給・価格動向レポート」は月2回公表しています。公表時にメルマガでお知らせしますので、ご希望の方はベジ探のトップ画面、メルマガ配信登録・解除ボタンから登録してください。

★この「野菜の需給・価格動向レポート」は、[http://vegetan.alic.go.jp/vegetable\\_report.html](http://vegetan.alic.go.jp/vegetable_report.html) に掲載しています。

※無断転載禁ずる。レポートに記載された情報をご利用になったことにより生じたかなる損害に関して、当機構は一切の責任を負いません。